

貧者の処罰図式—上との連帶考

深澤 建次*

はじめに

二つの資料をまず提示したい。

1. 19歳の元不良少年・ヤスジ君を主役にした「ネットカフェ難民」第3作のディレクター。彼は、生後親にして17歳で里親に見捨てられ、18歳で施設を退寮、ホームレス生活の後、NPOに支援され生活保護が受給できるようになってアパートの「人暮らし」をはじめた。

(当初) 日常生活の基本ができないことにスタッフも驚いた。掃除も入浴も、洗顔、歯磨きも教えられて覚える始末。生活保護費は支給されると1,2日で使い切ってしまう。そこでスタッフが金銭の管理を助言するようになるが、彼はあるとき、「夜遊びができない。干渉しそうだ」と食ってかかる。「金がなくなつて万引きしようが俺の自由」と逆ギレする。

支援の現場ではヤスジ君のケースはよくある事例に過ぎないが、ありのままの姿をさらした逆ギレのシーンに一般視聴者は強く反発した。“あんなワルに税金使って生活保護なんてとんでもない” “とここん働くかせて更生させるべき。周囲は甘やかせすぎ”などのメールが届いた(下線は深澤、以下同様)。

08年冬の派遣村で、「派遣村に来ているのはまじめに働こうという人なのか」(政府高

官)発言に関連して、

しかしマスコミ内でも同様の見方はくすぶっていた。生活保護の集団での申請に“我々の税金が使われる”と評する。再就職が進まない状況を“働く気がない” “仕事を選んでいるのでは?”などとするテレビコメント、新聞記事も次第に増えた。生活保護の開始決定が通例よりも早く、住所がなくとも申請できたことを“特別扱い”とした記事もあった。

…政策の不備をホームレスが国の幹部に直訴(して厚労省は)早速、少額資金の提供を決めたが、厚労省クラブ詰めの記者たちは“こんな横暴をゆるしていいのか”と感想を漏らし、実際“村民に振り回される”官僚に対して同情的な記事も出た(水島宏明、09、「貧困・格差をどう伝え続けるか」、『世界』09-8:85-86)。

2-1.『茶会の候補躍進中』

ティーパーティ

“小さな政府”を志向し、オバマ大統領の経済政策や医療保険改革への批判を通じて急速に広がった。僅か1年半ほどで全米に数千の傘下組織をもつまでになっている(朝日新聞20100916)。

(なお、この記事には、中間選挙予備選で茶会候補が勝利した7州の支持層の暮らしぶりのグラフが付いている。それによれば、茶会支持者の階級別内訳は上位(15%)を含む中産と労働者階級で91%を占め、上層は3%下層

* ふかざわ・けんじ

埼玉大学教養学部教授、社会学

は5%で合わせて8%である。)

2-2. 『米困窮者、最悪の4360万人』

09年度の米国の貧困率は08年の13.2%から14.3%に悪化（朝日新聞100918）。

2-3. 『貧困率：日本15.7%先進国で際立つ高水準』（毎日新聞091020）。

2-4. 『生活保護、196万人 昨年10月過去3番目の高水準』

保護を受けた世帯数過去最多を更新し…受給者の増加に歯止めがかからない（朝日新聞110112）。

以上の資料から容易に読み取れるのは次の矛盾である。日米双方で最悪のペースで貧困層が増加しているにも拘わらず（毎日新聞091020。09年米国では7人に1人が貧者に、貧困層は過去最悪増、朝日新聞101003），貧者への視線は、上から下まで様に厳しくなっている。ことに米国の場合、彼らのための保険改革に対する人々の批判は強まっている。オバマの医療保険改革は1世紀に渡って歴代大統領ができなかつた「偉業」であるにも拘わらず、この改革は中間選挙の有権者にとって「お荷物」（朝日新聞101021）になっている。両国とも、困窮者の増加に伴って「貧者の処罰」（Wacquant 09）は進行しているようである。「滑り台」社会の今日、なぜこのような事態が生ずるのだろうか。滑り落ちて貧者の仲間入りをする危険が誰にもあるとすれば、彼らと隣り合わせの人々、特に労働者（26%）及び中産階級（50%）が、サイレント・マジョリティを髣髴させる茶会を支持するのは理解しにくい。けれども実際、中間選挙でオバマ民主党は大敗しているのである（101102朝日新聞）。

小稿は、このような矛盾、すなわち下とでは

なく、上との連帶の生成過程を考する試みである。むろん、この「異常な」連帶については、すでに少なからず指摘されてきた（バウマン98=08、エーレンライク89=95、ガルブレイス92=93、ハーヴェイ05=07、ヤング99=07,07=08、セネット98=99）のは確かである。けれども私は、総じて、これまで捨象してきた問題があるように思う。

第一に、ワーキング・プラー（WP）の機能が、（少なくとも十分には）考慮されず「不可視化」されてきたのではないか。アンダークラス（UC）すなわち「悪いundeserving」貧者の「怠惰」（e.g. welfare queen）、「危険」（e.g. 薬物/犯罪）は強調される反面で、もう一つの新しい「よいdeserving」貧者WPの「健気さ」は無視/軽視されてきたのではないかと思うのである。福祉に頼らず「黙々と働く」というWP像¹を想起した瞬間、貧者は「怠惰/危険だ」と決めつけられなくなるはずである。「怠惰/危険」なUCとは対照的に、WPは、文字通り働いても貧困なのである。反面でこのような「健気さ」は、後述のように、UCの「怠惰/危険」を際立たせ、福祉給付の削減（「劣位処遇の原則」）、犯罪の厳罰化（「ゼロ・トランジット/割れ窓理論」）を正当化する。さらに産業社会の労働倫理（「眞面目に働けば貧困になるはずはない！」）は、働いているにも拘わらず貧乏なのは、怠惰の証だと主張する。このようなWPの多様な機能（方に怠惰/危険に無縁な貧者がいる！他方に福祉受給者は怠惰/危険だ！やはりWPは怠惰だ！）は、これまで十分に考慮されてきただろうか。

第二に、私は「UC=スケープゴート（SG）」論（ヤング、バウマン、Macek 06、Wacquant 09）に懐疑的である。すなわち、中産/労働者階級は、その不確実性/不安（バウマン:190）を、UCをSG（他者/外集団）化して投射/緩和する、という主張に私は疑問をもつ。そもそもUCの「怠惰

/危険」を、彼らがいかに責立てたところで、己の不確実性/不安を、解消することはむろん軽減することすらできない（セネット 06=08:169）。そればかりではない。今日、正規の中産/労働者階級が、どんなに鈍感だとしても、被雇用者の30%を越えている非正規の WP の存在に気づかないことなどありえない。社会学者（ヤング）に WP は不可視化されたとしても、生身の中産/労働者階級は、WP を見ない/聞かないわけにはいかない²。もっぱら UC の「怠惰/犯罪傾向」のみに注目して、WP の「健気さ」を無視することなどできない。彼らは、自分たち以上に不確実性/不安に苛まれている、また「自制/犠牲」（ヤング）を強いられている WP（あるいは給付を削減/厳格化される福祉受給者）の存在を無視することはできない。だとすれば、中産/労働者階級による UC の SG 化は相対化されないわけにはいかない。そればかりか、WP との連帶の契機が生まれても不思議ではないはずである。

関連して第三にこれまで、貧者を罰する主体が、明確にされてこなかったように思うのである。「貧者の処罰」という場合、その対象は、実際には WP、福祉受給者、薬物ディーラー、ホームレス、ネットカフェ難民など多岐に渡るはずである。処罰されるのはどのような貧者なのか、また罰する主体は誰/何なのかが曖昧だったようと思うのである。特に上（支配権力、知識人、メディア）から貧者を排除する姿勢が、そのままあたかもコピーのように、不確実性/不安を媒介にして、一般人（中産/労働者階級）へ波及していくというトップダウン図式（バウマン、ヤング、Macek, Wacquant）を容認するわけにはいかない。人々は、上から流される情報/言説を鵜呑みにするマリオネットではないからである（エーレンライク）。

最後に、消費「中毒」、「欠陥のある消費者」（バウマン）にも私は疑問をもっている。「先進

国」内での生産から消費への社会構造の趨勢的変容を認めないわけにはいかないとしても、人々が消費の誘惑に取りこまされているのではないのは、「ダウンシフター」（ショア 98=00:175-222）、「シンプル族」（三浦 09）に例証されるだけでなく、WP に強いられる「自制/犠牲」を想起すれば自明だからである。

1. トップダウン図式

最初に、上からの排除が自動的に下へ伝達されて具体化する、つまり人々はすぐ隣にいる貧者を罰するというトップダウン図式（バウマン、ヤング）二つを例示してみよう。

かつて貧しい人々を訓練して明日の労働者にすることは、経済的にも政治的にも道理に叶っていた。…今日の経済は大量の労働力を必要とせず、利益だけでなく、生産量も増やしながら、労働者とそのコストを減らす方法を学びとっている。…貧しい人々は、…労働予備軍ではなくなっており、労働倫理の呼びかけは次第に不明瞭になりつつあり、この時代の現実との結びつきを失いつつある。

記録されている歴史上はじめて貧しい人々は今や完全に、また純然たる頭痛の種であり、やっかいものである（バウマン 98=08:211-12）。

近代において秩序正しい生活が社会のすみずみに広まったのは、たんに完全雇用とフォード式大量生産を達成するためにそれが必要だったからである。…近年になって新自由主義が先進諸国で勝利を収めたのも資本にとって周辺にいる人びと（最も秩序を知らない人びと）に秩序を守らせる

理由がなくなったためである。今日の UC の人びとは社会から必要とされなくなり、彼らの労働力も不要となった。彼らに厳しく時間を守らせることも、彼らを訓練する必要もなくなった（ヤング 99-07:131-32）。

「固定的」近代から「液状的」近代への移行は、経済/政治的に「頭痛の種」（やっかいもの）になる新しい「貧者」を生み出す。そしてフォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行と共に並行する新自由主義は、資本の「周辺にいる人びと」を「社会的に不要」にする。アウトソーシング/規制緩和によるスリム/ダウンサイジング化（「小さな政府」）は、IT の技術革新と相まって、余剰労働者を恒常に生み出し堆積していく。それゆえ、余剰は、不況期はむろん好況期に（こそ）増産される（バウマン:81; Young 07:15）。正規の労働市場は縮小し、非正規の周辺的/低賃金労働部門は拡大していく（Young:15）。

労働力不足ゆえに、復職を要請されたかつての労働予備軍/失業者とは対照的に、余剰は「人間廃棄物」（バウマン:176）である。それゆえ、彼らに福祉を施して復職させる必要性は、「ワーク・ファーストモデル」（リース 07:121）に象徴されるように、政治的にも小さくなる。けれども「頭痛の種、社会に不要な人」が多くなれば、政治的に放置するわけにはいかなくなる。人間廃棄物の命名/カテゴリー化、否スティグマ化は必至である。これが二つ目の引用にあるように、旧来の貧者/下層階級とは異なる UC である。否、余剰を「よい」と「悪い」で選別³して後者を「階級外の階級」、「汚らわしく卑しい人間以下の存在」（バウマン 137; ヤング:214）にしたのである。因みに、手元の辞書 (Cobuild)によれば、UC とは、状況を改善する余地のほとんどない貧者である⁴。すでにここには、「普通」

とは対照的なアウトサイダーとしての「本性」（ダグラス⁵:105）が示唆されている。

確認しておかなければならないのは、余剰を生み出したのは経済構造である、そしてこの余剰は、政治的に「頭痛の種」にそして「社会的に不要」になって、UC と命名されたことである。つまり経済/政治/社会構造が、アウトサイダー（「階級外」）としての UC を構築した主体なのである。正確にいえば、外集団化して余剰/頭痛の種/不要を正当化するために UC と命名したのである。にも拘わらず、

（今日の豊かな社会で UC が果たす）最も重要な役割の つが、もはや有力な外部の敵に向けられない、恐怖心や不安を誤魔かす（suck-in⁶）ことである。集団の健全さに不可欠の薬だった外敵に替わって内敵となった UC は、個々人の不安定性から生ずる集団的な緊張を緩和する安全弁の役割を果たす。

… “普通の” 立派なアメリカ人を、福祉ゴロ、犯罪者や学校の落ちこぼれに対して連帯して敵対させているのは、彼らが対抗しようとしている人びとの極端な非 貫性である（バウマン:150-51）。

社会の中心領域の外側にいる人々、すなわち“外集団”は、社会全体が問題を抱えるとき SG にされやすい。SG にされるのは UC の人々であり、かれらは怠惰と犯罪にまみれた生活をおくっているとみなされる（ヤング:62）。

引用は、むろん同じ著者の同じ著作からである。今回の二つの引用では、外集団化の主体が、経済/政治/社会構造から「普通」の人々に移行している点に留意したい。余剰/頭痛の種/不要

は、「堕落/怠惰/犯罪」に具体化しているからである。それゆえ、三重の構造的排除は不可視化され、替わって UC の自己責任がクローズアップされ、UC の構造的排除は正当化される。このようにバウマン、ヤング図式は明快である。けれども前と今回の引用を並列させると、まるで人々は、構造的源泉とは無関係にあたかも自発的に、UC を排除しているようにみえないだろうか。人々は、構造的排除を、構造に由来する不確実性/不安を経由して、忠実に実行するイエス・マンのようである。実際、労働市場からの排除に市民社会からの排除が対応しているのである (Young 07:17)。これが、バウマンとヤング（さらに付け加えれば、ハーヴェイ、Macek, Wacquant）に抱く私の素朴かつ基本的な疑問である。上からの構造的排除を、己の不確実性/不安を緩和するために UC を SG 化する、という人々による下からの排除に、結合する彼らの図式は、そもそも成り立つのだろうか。確かに、SG 化は、政治/国家/司法/メディアそして新保守/新右翼の知識人が唱える「危機」「甘え」「モラル・パニック」「法と秩序」言説を媒介にしていることを、両者 (バウマン:158; ヤング:75)とも指摘している。しかし小稿では展開しないが、これらの言説の機能、つまり人々に受容されるプロセスについての分析は、双方とも不十分であると私は思う。それはさておきここで注目したいのは、これまで同様、同じ著作からの以下の引用である。

最近まで“長期失業”と呼ばれていたが、“余剰”という正しい呼び名に替わったものから身を守れるものはいない (バウマン:132)。

崩壊した家族、子どもを育てるシングルマザー、失業した友人などが身の周りにいな

い人などいるだろうか？ 現在はともかく、将来自分も同じ窮地に陥るかもしれないということに気づかない人は、この不安定な世界では、相當に鈍感な人だといえるだろう (ヤング:74)。

UC に対する、上からの構造的な排除に異議を唱えることなく、受容/追認している一般の人々は、その反面で UC あるいは WP への下降⁷に怯えているのである。彼らが、液状化/ポスト・フォーディズム構造に由来する不確実性/不安に苛まれているのは、私も同意する。ゲイティッド・コミュニティ、安全なショッピング・モール、セキュリティ・グッズの流行、そして体感治安の悪化(浜井、五十嵐⁸)、犯罪の厳罰化傾向は、その例証だからである。

けれどもこのような「安全/安心」への要求は、UC の SG 化に直接つながるだろうか。私は否定的である。前者が己/現状の「保守⁹」を導くのは確かだが、これを他者/UC に対する「攻撃」へ直結するのは短絡である。そもそも構造、正確にいえば新自由主義 (ヤング) あるいは消費主義 (バウマン) に由来する不確実性/不安は、UC を SG 化して解消、否、緩和されるだろうか。滑り台におかれて UC は明日のわが身であることを、不可視化される構造とは対照的に、自覚せざるをえない人々は、どうして「怠惰/堕落/危険」な UC という他者化ができるのだろうか。そしてこれができたとして、彼らはどのような「成果」を具体的に獲得するのだろうか。なぜ、不確実性/不安は、弱者への連帯感に結合する契機とならないのだろうか (Young:16)。

いったい、不確実性/不安の内実はどのようなものなのだろうか？「鉄の檻」に由来する疎外感との比較検討は後日の課題として、再度確認しておかなければならぬのは、このような不確実性に苛まれているのは、一般人だけではな

いことである。WP や福祉受給者の不確実性がより強くなるのは明白である。SG 論が普遍性をもつとすれば、UC は、SG をより必死に探すはずである。なるほど、虐待される幼児/高齢者、殺害/傷害される不特定の人々（ランダム・バイオレンス¹⁰）が標的なのかもしれない。貧困層が自己を非難し互いに懲罰を加えあうのも確かであろう（Young:48）。けれどもこれらの弱者が UC の SG になるとしても、彼らへの八つ当たりは、強い非難を浴びるのは必然である。対照的に、welfare queen への非難、犯罪者への厳罰化は容認されるのである。怠惰や犯罪を無条件に肯定する人はいないからである。だからといって、「UC=SG」で満足するわけにはいかない。SG 論を展開するならば、最も強い不確実性に苛まれる WP や UC をまず取り上げるべきではないか。なぜ UC は、専ら中産/労働者階級の SG の客体にされるばかりで自らは主体にならないのだろうか。バウマンやヤングには、ミドルクラス・バイアスが無意識のうちに作用しているのではないか、といったらいい過ぎだろうか。

2. UC の排除

1) 下向きの剥奪感・自制/犠牲

本節の課題は、これまで言及してきた、バウマンとヤングの、UC を下から排除するメカニズムを、素描して問題点を摘出することである。ここでは、まずヤングの図式を、先の引用を展開した資料（Young 07¹¹）を素材にしてはじめる。それは二つのメントから成り立っている。

①後期近代では、「下向き」の相対的剥奪感が蔓延している（:41）。

②この剥奪感は、中産階級の大多数が強いられる「自制と犠牲」を通じて、復讐心に変わり（:43）、UC に、「怠惰/危険」を賦課する。したがって、敵意、正確にいえばルサンチマン

の標的されるのは、「怠惰で堕落した福祉受給者」と「危険な潜在的犯罪者」である。

それぞれに異議を唱えたい。まず（上への連帯を示唆している）「下向き」について。ヤングによれば、製造業の衰退に伴って雇用が不安定になる後期近代で、能力/業績に即した報酬というこれまでの基準は、曖昧/カオス化し相対的剥奪感/不公平感が瀰漫する。私は、後述のように、実質所得の長期的な低落傾向という己の過去に対する剥奪感のほうがより重要だと思うが、とりあえず、ヤングの主張を是として先に進めよう。このカオスを前提にする限り不公平感は、上向き/下向きの双方向で生ずるはずである。格差の漸次的拡大という趨勢を念頭に入れるならば、上向きこそ主流になると思えないだろうか。しかしヤングは、上向きもありうるといいながら（:21;36）、メディアによる UC のステレオタイプ化を通じて（:36-37）、下向きの相対的剥奪感が蔓延すると断言する。中産階級の大部分（の不満を抱く層）は、UC は自分たちの支払った税金にただ乗りをして安逸を食っている、支援は怠惰にするだから働くせろと責めるというのである。なぜカジノ資本主義/マネーゲームで巨万の富を一挙に獲得する「勝ち組」に、あるいは躍スターダムを駆け上がって脚光を浴びるセレブに、中産階級は不満を抱かないのだろうか。なぜ貧者がセレブを賞賛しているのは疑いない（:50）と断定できるのだろうか。不満を下へそして連帯を上へ向けるメカニズムの解明が、ヤングには抜けている。少なくとも不十分であるのは否めまい。この点を明確にしているのが、後に触れるガルブレイス、バウマンそしてエーレンライクである。そしてエーレンライクにしたがえば、下向きよりも強い、上向きの剥奪感が作動していたことが明らかになるであろう。

もちろん私は、後述の通り、中産階級が下への剥奪感をまた上への連帯感を抱いていない、

否、抱くように操作されていないと主張するものではない。

その前にヤングの論旨を進めたい。下への剥奪感は、「自制と犠牲」を通じて、UCに対する復讐心に変わるという第二の論点にも、私は疑義を唱えたいからである。中産階級の大半が、不安定な仕事、薄給、長時間労働、共働きを強いられているのは確かであろう。しかしこれらに耐えているのは彼らだけではない。すでに指摘したようにもっと過酷な事態におかれているにも拘わらず、「怠惰な福祉受給者」とは対照的な「健気に働く貧者」も広範に存在しているのである。WPが、80年代以降顕在化した（エーレンライク）のは周知のとおりである。ヤングもこれを認めている。WPは、今日の富裕層の生活ばかりでなく、先進国／米国経済の中核的な機能的要件になっていると。しかし彼は、イデオロギー的なUC概念を構築するには、WPを不可視 invisible化しなければならない（:90）、UCの捏造とWPの不可視化は同じ他者化の本質を構成する（:89）という。その根拠は以下のとおりである。WPの労働は、税務／国政調査などの公式統計で捕捉されないし、働けば貧しいはずはないという労働倫理によって無視される。またWPの典型である家事使用人は「不在者 present absentee」にされるか、支配／服従関係に矮小化される。そしてUCの「異邦／危険性、墮落」を焦点化するメディアはWPを無視する（:87-99）、と。公的統計、労働観、富裕層の家事使用人に対する視線、そしてメディアがどうであれ、ここでは点だけ指摘する。実際の中産階級は、自分の隣にいるWPとともに日々働いているのだから彼らを「不可視」にすることなどできない。不可視化できない彼らが、UCを捏造することなどそもそも不可能である。だとするとこの捏造する主体は、誰なのか明らかにされなければならない。

もう一つ、あらかじめ留保しておきたい。中産階級の人々が、WPの存在を身近に認識していることは、即、相互連帶の、またWP自身による異議申し立ての契機に、直結しないことである。

2) 労働倫理・自己責任

UCへの敵対要因を、中産階級の下向きの剥奪感、自制／犠牲に求めるヤングと異なって、バウマンは消費主義を通じた労働倫理に焦点を当て、これによって貧者は処罰されるという。この場合の貧者とは、二種に分かれる点に留意したい。

は「悪い貧者」である。それは、下層階級とは異なる「階級外」、社会のアウトサイダーとしての「怠惰で危険」なUC（e.g. 落ちこぼれ、無業者、福祉受給者、シングルマザー、ホームレス、物乞い、アルコール／薬物中毒患者、街頭犯罪者 etc.）である。二は「よい貧者」、すなわち社会に復帰しうる潜在的インサイダー、「貧しくとも許容される境界の範囲内で適り繰りする」（バウマン：145）「本質的には立派な decent 単なる貧しい人々」（:147）である。そしてこの二つは、後者から前者へ下降するというヒエラルキーを構成している。

UCが 様に醜く、嫌悪感を催すのとは対照的に“単なる貧しい”人々は、 時的に不幸なものとして現れるものの、UCとは違つて、あらゆる正しい選択を行い、許容される社会の境界線の内側に復帰する、本質的には立派な人々である。UCに下降し、その状態にとどまることが選択の問題であるのと同様、貧困状態からの更生もまた選択の結果である（この場合には正しい選択の結果）。貧しい人間のUCへの下降が選択の結果だとする考え方がもつ暗黙の意味は、別の選択を行えば逆のことを達成した可能性があり、貧しい人間が社会的な下降を

免れた可能性である (:147).

引用から読み取れるように、最底辺に UC、中位に「単なる貧しい人々」、その上に「下降を免れた人」がいる。便宜的に最上位を「普通 ordinary people」として、この引用を検討してみる。「単なる貧しい人々」とは、具体的にどのような貧者なのか、バウマンは明示していないが、私は、まさしく「健気な」WP であると解釈する。「許容される社会の境界線の内側に復帰」する「本質的には立派な人々」とは、福祉に頼らず黙々と働く WP とイコールだからである。この限りで、バウマンはヤングのように WP を不可視化しない。むしろ UC と対照化している。このインプリケーションは重要である。

「福祉に頼らず黙々と働く WP」と「働け（か）ず福祉に頼る受給者」を並列させた瞬間、後者がどんなに真面目でも、「怠惰」にされるのは不可避である。前者が「健気」であればあるほど、後者に「危険」が付加され、「怠惰/危険」というステigmaが張られる。そしてこのステigmaは、福祉削減すなわち劣等遭遇の原則を正当化し、ステigmaは公認される。さらにこれは、後述のように「公費の無駄遣い」を導く。反面で、このステigmaは、どんなに悲惨な賃労働でも UC よりマシだ！ (:28) と WP を慰撫し、異議申し立てを抑圧して怒りを内閉する。この点は後に重要になってくるが、いま問題にすべきは引用の後半部である。すなわち WP から UC へ下降したのは、選択を誤ったからであるし、その状態に留まるのも選択の結果である。それゆえ選択を誤らなければ、UC への下降ばかりでなく、WP への下降も防げるという主張である。この場合、選択の誤りとは具体的に何を意味するのであろうか。

貧しい人々の悲惨さをその勤労意欲の欠

如のせいにしたり、その道徳的な堕落を非難したり、貧困を罪に対する罰だと指摘したりすることが、労働倫理が新たな消費社会の中で演じる最後の役割である (:75).

それゆえ、バウマンによれば、消費主義時代の今日、衰退している、かつての貧困すなわち失業、労働力不足、革命に対して不可欠の治療薬だった労働倫理は、余剰を隠蔽し貧者を処罰するときに限って復活させられるのである。未だに労働倫理で欺瞞的に統制されているのは、貧者だけであること、つまり罰する主体は、権力であることに留意すべきであるが、今は上の引用文に拘わらなければならない。前の引用で読み取ったように、貧者には、「悪い」UC と「よい」WP の二種類があるのであった。そして今回の引用で、この双方、すなわち普通から WP への、そして WP から UC への下降は、いずれも労働倫理の欠如という理由で正当化されるのである。けれども WP との対照化を通じて、UC への下降要因を労働倫理の欠如、すなわち怠惰に求ることは可能であるとしても、普通から WP への下降を、これで正当化できないのは明らかである。WP のほうがはるかに模範的に労働倫理を実践しているからである。もちろんすでに触れたように例外もある。余剰を知らず「貧困＝失業」を刷りこまれた旧世代は「働けば貧しいはずはない」というであろう。けれども WP とともに働く新世代の中産/労働者階級がこのような非難をするのは、到底、不可能である。

ならば健気に働くにも拘わらず貧者である WP はなぜ罰せられるのだろうか。バウマンの答えは消費主義に由来する「自己責任」¹²である。固定的近代から液状的近代への移行は、人々の役割を労働者から消費者に替える。その結果、前者の集団主義（連帯）と未来を志向（自制）する労働倫理は退却させられ、後者の個人主義

(選択の自由)と現在志向(即時的満足)が時代の精神になる。したがって消費者は、(集団主義/未来志向)の福祉制度(担税)に反発する。彼らは、福祉受給者の自己責任を追及するばかりでなく、そのための税金負担を拒否する。福祉は、消費者の自由の束縛する、しかも中央政府によって管理される律的な施策であれば層個人の自由を抑圧する。減税と組み合わされれば彼らの反発はより強くなる。消費者は、選択の自由を束縛するあらゆる法的規制に反対するのである(:60)。それゆえ、福祉受給者は「怠惰/危険」で「勤労精神を欠いている」という非難は、建前に過ぎない。公言しにくい、消費者の選択の自由の侵害という本音を隠蔽するために、建前として利用されるのが労働倫理なのである。「労働の尊さ」を正面切って否定する人はいないからである。けれどもUCをステイグマ化するうえで有効な労働倫理は、諸刃の剣である。カジノ資本主義のマネーチームは、労働倫理と相容れないからである。言い換えればこの倫理では上との連帶はできなくなるのである。

それゆえ消費社会の成立要件である自己責任が動員される。ではこの論理で、WPを福祉受給者と同様に罰することはできるだろうか。福祉に頼るUCはこの責任を放棄して、納税している消費者の権利を侵害する。けれども普通からWPへの下降を自己責任に帰したとしても、WPが公的支援に頼らない限り、福祉受給者とは異なって、消費への妨害にはなりえない。福祉受給者は、消費者の権利を侵害するのに対して、公的支援に頼らない限り、WPは非難どころか賞賛されるはずである。したがって、少なくともバウマンが上の二つの引用でいうような、UCへの非難は、WPには生まれない。精精、WPに下降したのは、自己責任だ、われわれには関係ない!という距離感/無関心でしかない。これを非難、敵対的に等置するのは短絡である。たとえ、こ

の距離感/無関心が、UCの「怠惰/危険」を際立たせる点は見逃すわけにいかないとしても。

結局、建前の労働倫理でWPを罰することはできないし、本音の自己責任を動員しても、WPへの下降は自業自得だと等閑視することしかできない。UCの「怠惰/危険」とWPの「無責任」それぞれの内包は同じではありえない。労働倫理は、UCを罰すれば罰するほどWPを賞賛しなければならなくなるという矛盾を内在している。そして自己責任論は、WPを等閑視するだけで处罚へ至らない。ヤングは、UCの非難を一面的に強調している反面でWPを無視している。ヤング、バウマン双方は处罚の対象としての貧者を、専ら福祉受給者に集中している点で偏向している。WPは彼らにとって二の次でしかない。同時に双方は上への連帶を追及していない。ヤングは論究していないし、バウマンの消費主義も不十分である。消費主義は、上、たとえばセレブへの共感を促すとしても、連帶を生み出すとはいえないからである。そもそも「集合的消費」に存在の余地はない(:62)のである。

3. 上への連帶

1) 減税策と上への連帶

般の中産/労働者階級が、下の福祉受給者を排除し、同時に上の富者へ連帶する過程の検討に入る。私は、「貧しい人に対するサービスは常に貧しい」(バウマン:96)、「再分配のパラドクス」(クルーグマン 07=08:120; 神野 10:113) を精緻化した「満足の文化」(ガルブレイス)に倣い、レーガンミックスの柱である減税と福祉予算の削減に注目したい。減税は、「トリクル・ダウン」と「強いアメリカの復権」を通じて、連帶を上へ誘導する。そして福祉予算の削減は、福祉受給者に「怠惰/危険」というステイグマを張ると同時に、人々を福祉から遠ざけて、下を

排除するからである。

第一に、政府支出/福祉を犠牲にした減税（と軍備増強）は、格差を拡大せざるをえない。富者の所得は「更なる儲け」に刺激されて大幅に増加する反面で、貧困率は「更なる貧困」に刺激されて急激に上昇する（サプライサイド経済学、ガルブレイス:125）からである。たとえば高額所得層への限界税率は、81年に70%から50%へ、さらに86年には28%まで下げられ¹³富裕層の所得は大幅に増加する（:39）。反面で89年、人口の12.8%は貧困ライン以下の生活を強いられるようになる（:25）。にも拘わらず福祉予算は優先的に削減されたのである。カーター（77-81）以来のすべての政権は、AFDCが連邦予算の1%に決して達しないのに、その削減を最優先課題にしたからである（Wacquant:49）。たとえば81年には70万世帯の公的扶助は停止され、AFDCは減額され、フードスタンプの資格喪失者は20万人に達し、メディケイド、フードスタンプ、学校給食の受給資格は厳格になったのである（岡田）¹⁴。貧者の増大に逆行して、給付は停止/減額されるあるいはその資格条件（資力調査）は厳しくなるのだから、福祉サービスの質は不可避的に劣化する。

第二に、質の劣化は、福祉サービスに与る人を限定/特定化する。そして支給条件の厳格化（屈辱的な資力調査、支給の有期化¹⁵、支給後の厳しい監視）は、申請者をさらに絞りこむ。自ら排除を招き、周辺化されることを敢えて受容しようとする人のみが申請するようになる（バウマン:112）のである。確認しておくべきは、「下向きの剥奪感/自制・犠牲」でもまた「労働倫理/自己責任の欠如」でもない、劣化した福祉制度それ自体が、受給者に「怠惰/堕落」というステигマを張ることである。ちなみに劣化以前の問題として、「受給権者」「保障機関」を明記する韓国の「国民基礎生活保障法」とは対

照的に、日本の「生活保護法」には、「要保護者」「被保護者」のように「恩恵」というステイグマが内在していることを付記しておく（日本弁護士連合会編 09:130;190）。加えて「捕捉率約20%」というきわめて日本的な事実は、ステイグマの強さを端的に示している（山森 09:34）。

他方で、一般の中産/労働者階級の人々は、福祉が劣化すればするほど、これを利用しようとはしなくなる。民間業者を利用するほうが得策になるからである（バウマン:109）。こうして人々は、福祉に無関心になっていく。さらに公費の無駄遣い/浪費感を抱き、その廃止を求めるようになる（:111）。福祉の劣化に比例して、その有効性は小さくなり、これに応じて必要度も減退するからである。

この点で、「満足の文化」（ガルブレイス）は示唆的である。上に述べたように、減税は、格差を拡大し人々を貧者と富者に二分する。ガルブレイスは、前者をUCそして後者を「満ち足りた多数派」と呼ぶ。この場合のUCとは、これまで想定してきた「怠惰/危険な福祉受給者」ではなく、実質的には、ヤングのWP、バウマンの「単なる貧しい本質的には立派な人々」さらに私のいう「健気な」WPに等しい。要するに「よい貧者」である。この最下層が劣化した福祉の対象者になるのである。次に「満ち足りた」とは、十分に所有し快適な生活をおくことができる、すなわち「経済的・社会的に幸運」に恵まれているという意味であり、「多数派」とは、「投票する」という点で、多数派なのである。ここには、経営者、科学者/法律家/医師/ジャーナリストなどの専門職はもとより、勤労者、職人、農民/労働者の一部まで、多種多様な人々が含まれる。このように多様な人々が、80年代「満ち足りた多数派」になっているというガルブレイスの指摘に、後述のように、私は違和感を抱くが、今その点はおいて、ここで指摘しておきた

いのは、バウマンやヤングの強調する悲観的な「不確実性/不安」と「満ち足りた」の対照性である。それはすでに、「UC=SG」を否定するばかりでなく、下向きの剥奪感に疑問符を付けるからである。

さて「満ち足りた人々」からみると、貧者と自分たちの生活は、公と私へそれぞれ特化している。彼らは公に依存するのに、われわれはそこから自立している。彼らは、公営住宅、公的扶助（フードスタンプ、福祉/児童手当）、公立学校/図書館/病院/公園/リクリエーション施設を利用するが、われわれは、公的支援に頼らずに自らの所得で、自宅を購入し私立学校/蔵書/民間保険の経費を賄う。公費は専ら彼らに費やされ、われわれは専ら私費で生活する。彼らは担税しないのにその恩恵を独占する。われわれは担税するのに恩恵を被らないうえに、生活は自前で賄わなければならない。こうして「満ち足りた多数派」は、二重負担を強いられている、公的支援は自分たちの負担に見合わない（バウマン:110）という不公平感を抱くのである¹⁶。そもそも多数派は、自分たちの利益になる政府支出を除いて、いかなる担税にも抵抗する（ガルブレイス:104）。己を利する公的支出は、貧者への支援とは異なって、自分たちを堕落させることは思わないほど彼らは私化している。私最優先の彼らは、福祉は勤労意欲やモラルをなくしてしまうから不要だ、「大々的な浪費」をするしか能がない人々に充当されてしまう（:63）と反発する。この反発が正当化されてしまうことを確認しておく。製造業の衰退に伴う雇用不安と公共投資の抑制に伴って、ゲットーは荒廃しテロと絶望の拠点に変わってしまう。そこでは社会的無秩序/犯罪/麻薬/無差別銃撃/家族解体が日常化する（ガルブレイス:52）からである。それゆえたとえ赤字財政でも、ゲットーの犯罪撲滅のために、警察と刑務所への予算は惜しげもなく

なく計上される。むろん「満ち足りた多数派」は、私生活を守るためにこの公費支出を歓迎する。それゆえ彼らの、貧者の生活支援のための公費支出に対する反対は、貧者の犯罪撲滅ための公費支出に対する賛成に替わる。その結果「怠惰な貧者」は「危険な貧者」へ変えられる。留意すべきは、雇用不安、公共投資の抑制という経済構造と政策の変容が、「減税そして豊かな生活」というオプラートに包まれて隠蔽されることである。言い換れば、不確実性/不安に慄く中産階級が、UCをSG化してこれを緩和しなくとも、「減税/豊かさ」は自動的に、UCに危険を附加するのである。

減税と福祉の劣化を通じた上への連帶図式についての留意点は以下の通りである。第一に「満ち足りた多数派」が福祉へ反発するのは、その受給者に下向きの剥奪感を抱いているからではなく、あるいは自制/犠牲を強いられているからではなく、上向きの羨望観（「トリクル・ダウン」）を抱いているからである。彼らは今の自分たちの快適な生活を維持したい、否、より快適にしたいという、上昇志向性を有しているのであって、下降する危険に慄いているのではないのである。減税を通じてより豊かになりたいという上昇志向性こそが、人々を連帶させ満ち足りた多数派を生み出すのである。彼らの第一義的関心は、上への連帶であって下の排除ではない。それゆえ第二に、貧者は、よいWPの場合でも、悪いUCの場合でも、満ち足りた多数派のSGにはなりえない。そもそもより「満ち足りた」生活を求める人々の視界に貧者はいない。彼らにSGを求める根拠すなわち不満/不安は存在しない。彼らがUCを「怠惰/危険」で排除するのは、上昇志向の障害になるからに過ぎない。第三に、ヤングやバウマンが想定する「下降に慄く中産階級/普通人」とガルブレイスの「満ち足りた多数派」との対照性は、何を示唆するのだろうか。

そもそもなぜ 80 年代という同じ時代を共有しながら、このような対照性が生まれるのだろうか。私は、時間的パースペクティブを念頭に入れればよいのではないかと思う。ガルブレイスの「満ち足りた多数派」が、通時的に 枚岩で存続しえないのは明らかだ。この層から少なからずの部分が、「満ち足りた」どころか「食うや食わず」の WP へ下降し堆積するのは必至である。「トリクル・ダウン」は幻想化し、「強いアメリカ」とは対照的な慘めな己が鮮明にならざるをえない。UC がたとえアメリカ経済の機能的要件 (:115)，社会的流動性を喪失した半永久現象 (:52) だとしても、下降してそこへ組みこまれる人々は増加し続ける。「満ち足りた多数派 v. UC」という図式はダイナミズムに欠けるのである。

2) ボトムアップ図式

上との連帶をより緻密に解明したのは、エーレンライク (Ehrenreich 89) である。ガルブレイスは、減税を通じて上への連帶を導くが、エーレンライクは、中産専門職階級に対する大衆の敵意を起点にした、この階級の内部抗争（「新右翼（新保守、ネオリベラリズム）v. リベラル派」）そして前者の勝利が、大衆の上への連帶そして下の排除を誘導すると説く。それゆえ、減税という国策が、直接的に「多数派」を上向きに連帶させるというガルブレイスに対してエーレンライクは、大衆と国策（「法と秩序」）の間に中産階級を介在させ、この媒介項が、人々を上へ連帶させるというのである。それは同時に、彼女の図式が、バウマンやヤングのようなトップダウンではなく、ボトムアップ¹⁷であることを示唆している。以下の通り、彼女にとって、中産階級という媒介項は決定的な意義をもつている。

①外集団化過程

まず新保守主義者 (W. A. ラッシャー 1975) は、人々を、「もつもの v. もたざるもの」ではなく、「働く生産者 v. 働かない非生産者」に二分する。「働く生産者」は、富者と「ミドルアメリカン¹⁸」（白人労働者を核とする下層中産階級を含む一般的アメリカ人）から構成される。双方はともにものを生産する。ブルーカラーはもとより、彼らを寛大で思いやりのある賃金で支援する資本家も生産者である (:166)。そして「生産」を通じて双方は、膨張する「働く生産者」を支えるのである。「働く生産者」は、福祉制度にかかるわる福祉士/カウンセラー、官僚、社会学者、法律アドバイザー、メディア関係者、知識人などの「ニュークラス」と福祉を受給する黒人から構成される。双方が「働く生産者」の場合は、福祉制度に「寄生」する「権力を渴望するトラブルメーカー」（ニュークラス:168）と「怠惰な人間」（黒人:166）だからである。双方は、勤勉、克己、家族への忠誠を忘れて利己に邁進する、道徳的に退廃した、「生産者」に依存する「非生産者」である。

「働く/支える v. 働かない/依存」に明らかなように、「生産者」と「非生産者」は、内集団/外集団関係にある。「もつもの」富者と「もたざるもの」ミドルアメリカンによる内集団の形成、福祉受給の貧者とこれを支援する「ニュークラス」が外集団化される、それぞれの過程の留意点は、減税（ガルブレイス）でも不確実性/不安（バウマン、ヤング）でもなく、ミドルアメリカンに堆積していた怒り/不満/敵意である。第 に、彼らは、「働く生産者 v. 働かない非生産者」以前の 60 年代に、黒人に「怒り resentment」(:167) を、福祉制度に「不満 complain」(:103) を、そしてリベラル中産専門職階級に「敵意 hostility」を、それぞれサイレントに鬱積していた。彼らは（ウォレスへの共感に象徴的なよ

うに) 公民権運動は行き過ぎであり、黒人暴動は自由の濫用であり、自制心を欠いた「甘え」であると憤慨していた。また、彼らは「対貧困戦争」以来拡充された福祉制度にも不満を溜めていた(アファーマティブ・アクションから除外された白人労働者、ハーヴェイ:73)。総体的には繁栄期だった60年代にも拘わらず、労働者階級の実質賃金は、ベトナム戦費によるインフレーションのために低減し(Ehrenreich:129)、「高税」感を産出したのである。この限りで(つまり報酬のカオスとは異なる根拠に即して)彼らは福祉受給者の黒人に剥奪感を抱いていたのである。最後に彼らは、福祉を指導するリベラル中産専門職白人エリート階級に敵意を抱いていた。この階級は、貧困はもっぱら黒人のみの問題であると断定し、自分たちの貧困を無視している、さらに、拡大する労働者階級と中産階級との所得格差を覆い隠していると反発していたからである。この上向きの剥奪感は、貧者への下向きよりも強く、彼らは強い敵意を中産専門職階級に向けていたのである(:106)。そもそも労働者階級にとって中産階級は、自分たちを命令、分析、教育、審判、定義する支配者である。のみならずメディアを通じて、思考、感性、消費、休息の方法まで教える鼻持ちならない輩である。対照的に、自分たちの意思表明の機会は構造的に遮断されている。自分たちは、粗暴/不従順をデモンストレートして注目を引く以外に、存在を知らしめることはできない(:139) サイレント・マジョリティなのである。この下よりも強い上への剥奪感/敵意は、後で決定的に重要になってくる。

以上の怒り/不満/敵意は、ニクソン以降の「法と秩序」政策とこれに擦り寄って興隆する新右翼の「貧困を生み出す福祉制度」言説を通じて、結合され具体化していく。まず、黒人暴動と公民権運動の「行き過ぎ」に対するミドルアメリ

カンの怒りは、ニクソン/アグニューの新保守的「法と秩序」キャンペーンで具体化され強化される。このキャンペーンは「黒人」を標的にして敵視したからである(:163)。実質所得の低下に伴う剥奪感に襲われていたミドルアメリカンが、これを歓迎したのは自然である(:165)。

次に、ミドルアメリカンの、福祉への不満とリベラル中産階級エリートへの敵意は、ときの政権に擦り寄る、否、擦り寄るために、仲間の中から60年代の「対貧困戦争」を指揮したリベラル派をSGにして台頭する新右翼イデオロギーたちによって具体化される。彼らは、福祉制度とこれを指導するリベラル派知識人を集中攻撃したからである。彼らによれば、60年代後半以降の米国社会には、中絶、同性愛、乱婚、ポルノ、ドラッグ、無信仰、フェミニズムなどのモラル・ハザードが蔓延していた。「甘え」が社会のあらゆる面に浸透したからである(:168)。そしてこの元凶こそ60年代に開始された「対貧困戦争」なのである。福祉制度ほど、「甘え」を広範に蔓延させた寛容策はないからである(:183)。そもそも、福祉は、貧しい黒人男性を怠惰にし、働くかずに失業手当で暮らすよう仕向ける(キルティ07:25)。諦念と憤怒、逃避と暴力、視野狭窄、無分別な性交渉はその所産である(ギルダー)。依存文化を奨励する福祉は、貧困の原因である(マーレー)ばかりでなく貧者から安定した家族、生活のための労働、その他のアメリカの伝統的価値を奪い、犯罪、非法出産、薬物乱用、十代の妊娠、離婚、性病、貧困の増加をもたらし家族生活を破壊した(86レーガン政権のレポート)のである(:185-86)。そして新右翼のこのような「福祉=諸悪の元凶」(ギルダー/マーレー)は、レーガンノミックスを支え米国の支配的文化に転化していく。

こうしてミドルアメリカンに堆積していたサイレントな怒り/不満/敵意は、「法と秩序」政策

と、福祉制度及びリベラル派知識人に対する新右翼の攻撃を通じて、公的に承認/正当化され相互に結合される。その結果、まず「福祉に寄生する怠惰な貧者黒人」(:166)が生まれる。そしてこの黒人像は、政権と新右翼の相思関係の継続に伴って、自己成就するばかりでなく強化される。福祉攻撃は、公共予算の削減を正当化しひートの荒廃を促進し、黒人コミュニティは人々から敬遠される「危険地域」に変わる。それゆえ監視は強化¹⁹され、微罪でも拘束/収監され数値上の犯罪率は「上昇」し、ゲットーは「犯罪の温床」になっていく (Wacquant:26)。こうして「怠惰」に「危険/犯罪」が付加される黒人は、永久に更生できない UC (Ehrenreich: 164) に転化する。50 年代の「貧困の文化」のリベラルな黒人は、公的支援に溺れる怠惰で暴力的なおぞましい黒人に変わる (:165)。更にジェントリフィケーションの進行は、新しい貧者すなわち徘徊する「危険なホームレス」を生み出していく (:240; サッセン 01=08:311; Lees, Slater, Wily 08)。

このような貧者の「絶対的他者化」(Macek:50)については、すでに前節で触れた。ここで重複したのは理由がある。黒人の絶対的他者化が、リベラル派知識人にどのような影響を及ぼしたのか、そしてそれがミドルアメリカンにどのような意味をもったのかを、明らかにするためである。「怠惰で危険な UC の黒人」の内包は、「対貧困戦争」を指導したリベラル派知識人へ波及せざるをえない。ゲットーの荒廃、「犯罪」統計を耳目したミドルアメリカンは、(新右翼に教えられるだけでなく) 自ら、福祉を指導したリベラル派知識人たちへ疑惑を向けざるをえない。この疑惑に信憑性をもたせる新右翼のレトリックは巧みである。

まず 70 年代に、貧困対策、その設計を指揮/支援するプランナー、シンクタンク職員、社会

科学者などの専門職階級の存在基盤は、財政的にも学術的に脆弱になる。「対貧困戦争」を凌駕するベトナム戦費、限界の時代を告げるスタグフレーションと石油ショックは、彼らのための予算を削減し、政界/学界で活躍する機会を少なくしたからである (Ehrenreich:155)。そして高揚する消費者運動、環境/健康/安全への関心に経営者の危機感は募る。存在理由の脆弱化、資本主義の動搖、「法と秩序」策は、野心的な新保守主義者/新右翼イデオロギーが台頭する基盤を整えたのである。後者の代表的論客のマレーは、「対貧困戦争」に賛同した(学者、ジャーナリスト、著作家、政治家、判事、弁護士、医者、ビジネスマンなど)多様な人々の中からリベラルな知識人を恣意的に摘出して「エリート集団」と呼称する (:152)。しかしこの恣意性は隠蔽される。なぜなら「リベラリズム」は「エリートの利益」を反映し「普通」「主流」の人々に反する「象牙の塔」の思想である、という 70 年代以降の中枢的な右翼知識人の言説を利用したからである。加えてウォレス/アグニューの選挙運動は、「リベラルエリート」を初めて実際に攻撃の標的にしたのである (:144-45)。この言説と標的に、ミドルアメリカンの中産階級への敵意が結合されて、大衆に離反する「リベラルエリート集団」は現実化したのである。しかし「エリート」では、ミドルアメリカンを敵対させるには不十分である。「仲間」だった「前成員」は「非成員」よりも強く非難されなければならないからである。それゆえ「脅威」を付加して敵対感を強調するために、「左翼」ではなく「ニュークラス」と命名するのである。階級的に団結して権力を渴望している、資本主義の転覆を意図しているという脅威を鮮明にするためである (:153)。こうして実際には、階級でも集団でもないリベラル派知識人たちは、大衆に離反する「エリート」を越えて、ミドルアメリカンに

敵対する「邪悪なニュークラス」(バーチ教会:163)に収束させられる。

要するに、黒人の負の属性(怠惰/危険/犯罪)は、新右翼を経由して、その支援者であるリベラル派知識人を、脅威の「新たな階級」に変えて「犯罪」を導く。その反面で、アメリカの伝統を破壊したというこの犯罪は、同様にして、黒人の負の属性を更に強化する。こうして黒人とリベラル派知識人の間で、負の属性を相互に拡大するスパイラルが作動する。したがってミドルアメリカンの双方への敵対感は、次第に強化される。これがエーレンライク図式の意義であるが、ミドルアメリカンの第一の敵は、黒人ではなく中産専門職であることに留意しておきたい。この階級への敵意が従前から蓄積していただけではない。また声を挙げられないサイレントだったからだけでもない。黒人のUC化は、「ニュークラスの犯罪」を媒介にして、初めて具体的に解明されて正当化されるからである。ミドルアメリカンは、赤字財政にも拘わらず、そして実質的な所得の長期低落に苛まれる自分たちの苦悩をよそに、福祉に「寄生」して公費を「横領」する「ホワイトカラー犯罪」に憤慨していたのである。福祉受給者はこの階級に踏み台にされた犠牲者でしかない。糾弾されなければならぬのは「官僚」²⁰(ガルブレイス)の徒食であって、社会的弱者の甘えではないのである。したがって「官僚」への攻撃は正当化され強化されると同時に、社会的弱者を非難する「後ろめたさ」は緩和される。税金の「無駄遣い」に反対しない人はいないと同様に、社会的弱者への支援を否定する人はいないからである。ガルブレイスと関連させれば「官僚」への敵意こそ、福祉予算の浪費感を産出したのである。また、ヤングやバウマンに関連させれば、UCは、ミドルアメリカンのSGではありえない。彼らが福祉に反発するのは、不確実性/不安を

UCに投射するからではないのである。そもそもエーレンライクの図式に、ミドルアメリカンの不確実性など存在する余地はない。70年代までは、下層中産/労働者階級は未だ健在であり流動化していない。「対貧困戦争」で救済の対象から除外されて、福祉制度とその受給者に対して、また上層中産階級に対して、怨念を募らせていただけで、自らの下降の危険を予知することなどできなかったのである。危険ではなく、蓄積していた怨念を、新右翼に汲み上げられたからこそ、ミドルアメリカンは福祉を嫌悪したのである。これがボトムアップの実相である。

ではなぜリベラル派知識人は、新右翼の理論家自身ですら証拠は不要と認めている(:172)

「ニュークラスの犯罪」告発に、反論しなかつたのだろうか。できなかつたのである。財政的にも学術的にも脆弱化した存在基盤は、発言力を弱めざるをえない。対照的に新右翼の勢力が拡大するのは確かである。しかしこれは本質的要因ではない。決定的なのは、中産階級の「転落の恐怖」を新右翼が十分に了解していたことなのである。それゆえ新右翼は、「ニュークラスの犯罪」を徹底的に叩くことができた、実際、70年代に攻撃は過激になっていく(:167)のである。リベラル派は人として防戦を張れずに、沈黙を余儀なくされたのである。できたのは後悔と自己批判のみだったのである。自分たちは福祉に固執しすぎた、大衆から遊離したエリートだった、勤勉と家族倫理をないがしろにしてきた(:193),と。叩かれた彼ら自身にとってすら、右翼の攻撃は尤もに思えたのである。なぜなら、

…彼らが甘やかされてきたからではなく、また十中八九わがままだったからではなく、甘えと放縱²¹こそ彼らが最も恐れていたからである(:194).

中産専門職は、そもそも、甘えに対する自制なしには、存在できないのである。知識/技術という彼らの唯一の資本は、経済的な資本と異なって、弛まぬ自制なくして得られないし維持することも増殖することもできないからである。新右翼の甘え攻撃に反論すれば、自己の存立基盤が破壊されかねなかつたのである。それゆえリベラル派は、沈黙せざるをえないばかりか、自己批判すらしたのである。換言すれば、新右翼は「道徳的正当性」を確信して攻撃できたのである。攻撃する/される双方とも、「反甘え」それ自体には、同意せざるをえないのである。攻撃の大儀は共有される一方で、双方に圧倒的な勢力差があつたのだから、勝負は明白である。新右翼のニュークラスへの攻撃は文句なしの大成功（:192）に終わるのである。

②内集団の解体？

けれども富者とミドルアメリカンの連帯が幻想化するのは必然である。そもそも貧困層の40%はWPなのである。新右翼はこの事実を黙殺する。懸命に働いても報われないWPほど、勤勉/自制という伝統的な価値を破壊する人はいないのに、右翼はその存在を無視する（:166）。なぜか。その解答は「寄生」である。これを通じて貧者は福祉制度/ニューカラス（の「犯罪」にまで）に専ら結合され、WPは視界から消えるのである。換言すれば、貧者は福祉への「寄生」すなわち「怠惰」なしには存在しない。自立て健気に働くWPは、福祉を利用しない限り、「怠惰」ではなくしたがつて貧者ではありえない。むしろ勤勉を実践する模範的ミドルアメリカンなのである。

けれどもレーガン政権の82/83年の景気後退期に、数百万のブルーカラーは失業し貧困に直面する。のみならず彼らは、福祉サービスに頼れることに気づく。失業補償/食料割引/医療

扶助は、到底十分とはいえないし、給付資格は厳格になっていたからである。だとすれば、右翼の同盟軍であり支持者であったサイレント・マジョリティの数百万が、福祉の受給者になつたか、もしくはWPへ下降したはずである。こうして80年代には、福祉に「寄生」する黒人貧者とは異なる新しい貧困（像）、すなわちWPがより顕在化せざるをえない。新右翼の同盟軍であったミドルアメリカンの少なからずが、ここに落ちていく。もちろん、伝統的価値、甘への人間防御壁としてブルーカラーを利用した新右翼は、彼らに手を差し伸べようとはしない。強固な組合という文化をもつたアメリカのブルーカラーは、次第に重荷になっていくからである。70年代の始まりとともに、企業エリートたちはこの重荷の解消に全力を傾ける。すなわち労賃の低い外国へ外注し、資本を製造業から金融投機へ移転し工場と技術を衰退させ、それでもしがみつくブルーカラーの賃金を切り下げる、生活を劣悪にした。その結果、1,150万の労働者が79-84年に失業し、新たな職に就けたのはその60%だけであり、そのほぼ半分の仕事は以前よりも低賃金だったのである。こうして80年代「快適な中間の範囲」すなわち「満ち足りた多数派」からブルーカラーがこぼれていく。工場閉鎖に伴つて町と住民は衰退し、彼らは製造業に替わつて族生するサービス/商業/ファースト・フードなどでの低賃金/不安定労働を余儀なくされる。ならばなぜもと労働者階級は、WPへの下降に怒らないのだろうか？ エーレンライクの答えは、リベラル派との戦いという名目である。つまり右翼は、リベラル派を第一のSGに立てることを通じて、ミドルアメリカンのWPを切り捨てることができたのである。

ニューカラスに対する仮想の戦いは、疑いもなく、彼ら（新右翼）に道徳的正義感を

注入した。…彼らは、働き者や貧者をいじめる政策を、邪悪で、幸いなことに全く目に見えない無力な“リベラルエリート”に戦いを挑んでいるという名目で、推進することができた（:195）。

ミドルアメリカンに、自らの思いを表現する回路は存在しないことはすでに述べた。代弁者は新右翼しかいないのである。したがってここでは、切り捨ててもサイレントであるという従前からの「弱み」を衝かれたのである。失職者はもちろん、WP、福祉受給者おの内に、そして相互間に連帯の基盤は、強固な組合に頼れたブルーカラーとは対照的に、そもそも存在しない。失業者、WPに組合はないし、福祉受給者相互の連帯も困難である。むしろ相互の相克、福祉士との支配/服従関係が常態²²なのである。失職者、WPそして福祉受給者は、孤立させられ、異議申し立ての機会は奪われサイレントに内閉される。ミドルアメリカンにサイレントに蓄積していた怒り/不満/反発は、新右翼と政権によって標的が定められ発散することができたが、失職者、WPそして福祉受給者の場合、いかに強い怒りでも、それを自ら表現する機会はないし、また代弁してくれる味方もいないのである。切り捨てられたミドルアメリカンは、再びサイレントを強いられるのである。そして消費主義の個人主義/自己責任の論理は、この事態を等閑視するのである。

しかしこの沈黙への内閉に限界があるので明らかである。従前のサイレントな怒りを新右翼にくみ上げられて緩和されたミドルアメリカンが、今度は同じ新右翼によって切り捨てられて、再びサイレントに留まることなど所詮、不可能だからである。

終わりに

今日の新しい貧困の主役であるWPについて、バウマン（98）/ヤング（99）、ヤング（07）、ガルブレイス（92）そしてエーレンライク（89）の所説を私なりに検討してきた。けれどもいずれにおいても、その扱いは十分とはいひ難い。

番古いエーレンライク（89）が、一番新しいヤング（07）よりも、まだWPにまともに向き合っているのが不思議だ。なぜ後者は、WPを「不可視」化するのだろうか、なぜバウマンは「新しい貧困」にも拘わらず、WPと呼びずに、敢えて「単なる貧しい基本的に立派な人々」と呼ぶのだろうか。なぜガルブレイスはWPではなくて、UCを使うのだろうか。エーレンライクにも私は不満である。既述のように、貧者を、専ら福祉に結合すれば、福祉から自立したWPは、貧者カテゴリーからはずれ勤勉なミドルアメリカンに替わる。彼らはいかに貧困でも、つまり低賃金/長時間/短期契約労働に従事する、否、させられる限り、貧者ではなく非正規労働者に替わる。したがって非正規という貧困は隠蔽されて、彼らは眞の貧者つまり福祉受給者から分断される。隔てられるのが黒人と白人であるとすれば、厳しい分断にならざるをえない。他方で、福祉受給者同様、ものいえぬWPは正規労働者からも分断される。「正規の貧者」でもまた「正規の労働者」でもないWP、これが不可視化の意味であると私は思う。けれどもこの状態が続かないのは明らかだ。正規からWPへの、そしてWPからUCへの下降が増えれば、それぞれを隔てる壁は脆弱にならざるをえない。フレキシキュリティflexicurityはその例証であろう。ようやく存在に証明が当たられ、ものをいいはじめたWPの行方が問われなければならない。けれどもまず求められるのは、正規の人々の自覚である。

政府が施し物をほとんど引き上げてしまった今、そして、貧困層の圧倒的多数が外へ出て、ウォルマートやウェンディーズで身を粉にして働いている今、私たちは彼らをどう考えたらいいのだろう。非難も恩着せがましい態度ももう合わないとすれば、いったいどんな見方をし、何を感じるのがふさわしいのだろう。…私たちがもつべき正しい感情は恥だ。今では私たち自身が、ほかの人の低賃金労働に“依存している”ことを恥じる心をもつべきなのだ（エーレンライク 01=06:290）。

註

1. これはむろん理念型であって、実態を示すのもではない。WP がたとえば派遣切り/雇い止め仕事と住まいを同時に失ったとき、わが国には「就職安定資金融資」制度があった（申請偽造/不正受給が相次いで 10 年 9 月廃止、朝日新聞 110105）。同様に「福祉受給者」も、実態としては、全面的に受給に依存して一切働いていないわけではない。福祉受給と就労が両立しているケースも少なくない。
2. 日本郵政の社員 44 万人のうち、21 万人が非正規社員である。非正規規模は日本最大、仕事内容は正社員と変わらないが給料は正規の 3 分の 1 で、ある非正規社員の年収は 230 万円である（朝日新聞 100702）。
3. 特定のカテゴリーの外延が大きくなれば、カテゴリーの細分/下位分化は必然のように思われる。貧者またエイズ患者が増えれば、「よい貧者/患者」と「悪い貧者/患者」のように、わが国の、雇用保険受給者も同様である（05 年、雇用保険法改正）。ただしこの場合には、善悪を示唆しない「特別受給資格者」というカテゴリーが新設される。けれどもそれは同時に「一般被保険者」の給付日数/支給金額の引き下げにリンクしている（本田 10:151）。
4. 岩田によれば、UC 論は、社会的排除よりもモラルに欠けた特定層の固定的イメージに結びついていると非難されるという（岩田 08:38）。
5. ダグラスはいう。「排除が機能してアウトサイダーのカテゴリーが確定されるときはいつでも、隔離されたカテゴリーは普通と違った本性をもつものと信じられる傾向がある」（74=79:105）。
6. 訳者は sack in を「（恐怖心や不安を）吸収する」と訳すが、これでは、恐怖/不安が解消されてしまう。SG 化すれば問題は解決されてしまうではないか。それゆえ私は「誤魔かす」と訳す。なお、このように、引用文は必ずしも訳本に忠実ではなく、私が手を加えていることが多々あることを断つておく。
7. 「下降」とエーレンライクの「転落」とは異なる。後者は、中産専門職階級の存在理由である「自制」を喪失する精神的恐怖を意味する。それは単なる下降移動ではない。
8. 「同世代の建築家と話していると、住宅を設計するとき、施主がセキュリティのことばかり気にすると、しばしば聞かされるようになった。これは明らかに、数年前にはなかった現象である。われわれは、いつから見知らぬ恐怖に怯えるようになったのか」（五十嵐 04:24）。
9. 病理ではなく正常な防衛過程としての偏見を 3 類型化した、ヤングブルーエルはその一つである「脅迫型偏見」について、次のように述べる。経済的安定の喪失は、侵害行為、レイプのように感じられ、これに対する対抗手段は、壁の再建、能動性の回復、法と秩序の制定である。移民・貿易規制、排斥措置/割り当てが自分たちの救済措置である（ヤングブルーエル 96=07:434 35）。
10. また「ノーロング・ターム（長期的思考はダメ）」のもので 4 回転職し、「物語を紡げない短期的なフレキシビリティと変転を旨とする世界に住んでいる」（26）若者リコはセネットに次のように語っている。「彼は、かつて自分はリベラルだった、といった。貧者を扶助し、黒人や同性愛者などの少数派に対して穏当にふるまう、アメリカ的寛容を意味するリベラルである。父エンリコが示した黒人や外国人移民などに対する不寛容を恥じていた。だがリコは、働きはじめてから “文化的保守主義” になったという。同輩たちのほとんどがそうであるように、彼も社会的寄生を嫌う。それは、政府から支給された社会福祉小切手をアルコールや麻薬のために振り出す母親のような輩だ。彼はまた、いいっぱなしで終わる会社の会議にも似た“自由な子育て” という価値とは反対の、ゆるぎない厳格な共同体的行動基準の信望者になった。共同体理想の一つの例として、リコは、親の名に値しない親から子どもを引き離して孤児院に入れるなどを提案している一部保守層の考えに賛成だ、といった」（セネット 98=99:21 22）。
11. このランダム性は、活動家、行政、政治家、専門家による構築である（Best 99）。
12. この訳本は「ひどい！」の一言に尽きる。こんな訳本が公刊されることに驚くのは私だけだろうか。

12. この「自己責任」は、他者（貧者）に要求されるが、自己には要求されないという、非対称を有している。後の「満ち足りた多数派」についての叙述を参照されたい。そして、野宿者が抱く「自己責任」との違いに留意したい。湯浅は述べている。「…99%といつていいかもしれませんが、野宿者のみんなが、野宿になつたのは自分が悪いといふし、私の所属するNPO法人自立生活サポートセンターくもやい>に相談に来る人たちも、食べていけなくなつたのは自分たちのせいだと。現場で対応していると、それはもう痛々しく、やりきれない思いをすうつとしている。なぜそこまで思っちゃうのか。甘やかす必要はないといっている人も含めて、結局、人を頼ってはいけない、頑張っていれば貧困にはならない、といわれてきたし育てられてきたからです。そういう今までの自分の考え方と辯證を合せようと思ったら、当事者はそう思わざるをえない。なので、そこはもう一回、一から人を作り直すくらいでないと、なぜ怒らないのかと当事者にいってみても解決しないと思います」（小川 09:73 74）
- 同様に、若者ホームレス 50 人の聞き取り調査を実施した飯島の「行政や社会への不満や望むことは？」に対する圧倒的多数の回答は「特にない」であり、大半は現在の状況は自分の性格、過去の行いが招いたのだから、社会に責任はないと反省の弁を述べるという（飯島 10:64）。
13. 日本の最高税率は83年 75%だったが、07年以降 40% に下げられた（藤森 10:343）。
14. 日本の生活保護基準の一連の引き下げは、03 年度からはじまっている（本田 10:119）。
15. 生活保護費の支給が3 兆円を超えた09年、指定都市市長会は、国に3 5 年の支給の有期化を要望している（朝日新聞 0110122）。
16. これを日本にあてはめれば、わが国の年功支出型賃金システム、すなわち加齢とともに社会保険料は上昇する反面で大学学費/家賃/医療費の負担は大きくなるというシステム自体に、福祉受給者への反発が内在しているということになる。そして米国同様、実質所得のこの 20 年間の低下を念頭に入れれば、人々の福祉への反発は一層強まるのは明らかである（堤・湯浅 08:151）
17. 以下の叙述は、エーレンライク自身が明示しているものではなく、彼女の主旨を私なりに再構成したものであることを断つておく。
18. 訳者は、middle American を、根拠を示さずオールド・アメリカとする。私が原著に当たる限り、ミドルアメリカンは、必ずしも、「オールド」つまり「伝統的」であるとはいえない。むしろ平均的アメリカ人とするほうが的確であるように思う。
19. 貧困の監視を強化すれば、「犯罪の芽」を見出すのは、きわめて容易でありほぼ必然である。「ある人の貧困が、その人の無分別な行為 学校の中退、婚外出産、薬物の使用、仕事での慢性的な遅刻 にいくらかでも関係していないような事例を見つけるのは困難である。そして、また、お粗末な育児、不十分な教育、将来の展望が見えない地域のみすばらしい住宅、といった親から引き継がれた境遇に多少とも関係していない事情を見つけることも困難である」（シプラー 04=07:11）。
20. ガルブレイスによれば、「満ち足りた多数派」は、「善良な公務員」とニュークラスのような「官僚」を区別する。
21. 訳者は、下線部（原文は this）を、新右翼によるリベラル派に対する「このような攻撃」と誤訳している。これでは、エーレンライクのキーワード「転落」が全く把握できなくなってしまう。
22. 生活保護の受給者が、他の受給者への「濫給」を非難する、またケースワーカーが人々と同じような偏見をもって「支援」する事例については、例えば、岩田（07）を参照されたい。岩田によれば、身近にいて熱心に支援している援助者ほど、シビヤな貧困観を抱く（:226）という。また、シプラーは、かつての貧者が、現在の貧者に最も厳しいのではないかと指摘している（シプラー:37）。ブルデューの指摘は示唆的である。階級間に「大きな差異が見られても、それは本性上の差異に基づいたものとみなされる…ために寛大に許容されることが多いが、自分と同じ階級の人々…に対してはほんの僅かな偏り、ほんのちょっとした過ちも見逃されない」（79=90 II:203 04）。

文献

- Z. バウマン, 98=08, 伊藤茂訳, 『新しい貧困』, 青土社.
- Best, J., 99, *Random Violence How We Talk about New Crimes and New Victims*, California Uni. Press.
- P. ブルデュー, 79=90, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオーン』, 藤原書店.
- M. ダグラス, 74=79, 浅田彰/佐和隆光訳, 『儀礼としての消費』, 新曜社.
- Ehrenreich, B., 89, *Fear of Falling*, Pantheon Books
（中江桂子訳, 95, 『‘中流’という階級』, 昌文社）.
- B. エーレンライク, 01=06, 曽田和子訳, 『ニッケル・アンド・ダイムド』, 東洋経済新報社.
- J.K. ガルブレイス, 92=93, 中村達也訳, 『満足の文化』, 新潮社.
- 浜井浩一, 芦沢一也, 06, 『犯罪不安社会』, 光文社新書.

- D. ハーヴェイ, 05=07, 渡辺治監訳, 『新自由主義』, 作品社.
- 本田良一, 10, 『ルポ生活保護』, 中公新書.
- 五十嵐太郎, 04, 『過防備都市』, 中公新書ラクレ.
- 飯島裕子/ビッグイシュー基金, 11, 『ルポ若者ホームレス』, 筑摩書房.
- 岩田正美, 08, 『社会的排除』, 有斐閣.
- 岩田美香, 07, 「当事者意識: 貧困当事者とは誰か?」(青木紀/杉村宏編著, 07, 『現代の貧困と不平等』, 明石書店:210-228).
- 神野直彦, 10, 『“分かち合い”の経済学』, 岩波新書.
- K. キルティ, 07, 「“どん欲さは善”か」(青木紀/杉村宏編著, 07, 『現代の貧困と不平等』, 明石書店:22-44).
- P. クルーグマン, 07=08, 三上義一訳, 『格差はつくられた』, 早川書房.
- Lees, L., Slater, T. & Wily, E., 08, *Gentrification*, Routledge.
- Macek, S., 06, *Urban Nightmares*, Uni. Minnesota. Press.
- 三浦展, 09, 『シンプル族の反乱』, KK ベストセラーズ.
- 日本弁護士連合会編, 09, 『労働と貧困』, あけび書房.
- 小川朋編著, 09, 『派遣村その後』, 新日本出版社.
- 岡田美代子, 「レーガンミックスとアメリカの社会福祉」
<http://www.ritsumei.ac.jp/~yamai/sotsuken02/okada.PDF>
- E. リース, 「政策: 合衆国における福祉削減の原因と結果」(青木紀/杉村宏編著, 07, 『現代の貧困と不平等』, 明石書店:116-144).
- S. サッセン, 01=08, 伊豫谷登士翁監訳, 『グローバルティ』, 筑摩書房.
- J. B. ショア, 98=00, 森岡孝二監訳, 『浪費するアメリカ人』, 岩波書店.
- R. セネット, 98=99, 斎藤秀正訳, 『それでも資本主義についていくか』, ダイアモンド社.
- , 06=08, 森田典正訳, 『不安な経済/漂流する個人』, 大月書店.
- D. K. シプラー, 04=07, 森岡/川人/肥田訳, 07, 『ワーキング・プア』, 岩波書店.
- 堤未果・湯浅誠, 09, 『正社員が没落する』, 角川書店.
- Wacquant, L., 09, *Punishing the Poor*, Duke, Uni. Press.
- 山森亮, 09, 『ベーシック・インカム入門』, 光文社新書.
- J. ヤング, 99=07, 青木秀男他訳, 『排除型社会』, 洛北出版.
- Young, J., 07, *The Vertigo of Late Modernity*, Sage (木下ちがや他訳, 08, 『後期近代の眩暈』, 青土社).
- E. ヤングープルーエル, 96=07, 栗原泉訳, 『偏見と差別の解剖』, 明石書店.